

## 杖道を見て

古武道と聞くと、日本の伝統的なイメージが膨らみ、武士を想像させる。武士の印象は刃物、鈍器によって闘いを交えるものである。そのような印象を具現化し、競技にしているのが剣道ではないか。剣道の詳しいルーツは知らないが、少なからず、武士に関連していることはわかる。そして、個人的な見解ではあるが、剣道をより芸術化したのが、今回観た杖道である。杖道の競技性、ルール、魅力とはなんであるか。私の視点から捉えたものを綴っていく。

杖道は太刀と杖を使って行われる日本の古武道である。太刀と杖と聞くと、激しい闘いが想像できるが、強いぶつかり合いとは無縁である。空手の型のようなもので、武器の扱いを含めた形が求められる。その形が勝敗を決めるポイントではないか。

詳しい配置、流れは、ひとつのブロックに競技者4人、審判3人がいる。ブロックの形は縦約10m、横約10mの正方形になっている。ブロック内には4本の線が引かれており、対面で2つの個人戦ができるようになっている。競技者は4人であるが、2人がチームになっているチーム戦である。初めは挨拶から始まり、挨拶は基本的に二回お辞儀をする。この際には武器を持ち替える。太刀と杖を入れ替えるので計4回のお辞儀をする。試合においての格好は胴着に武器を持つのみで、足元は裸足である。胴着には紺色と白色がある。試合に性別、年齢の区別はなく、国籍を超えたものもある。試合判定は審判が行い、白と赤の旗の総数で勝敗が決まる。勝利をした後は特別、喜びを露わにすることはなく、相手を尊重している。試合中は「エイ」と「ホー」が基本的な掛け声で、声量が大きいものが多い。

杖道は太刀と杖で行われているが、この2つでは扱い方が大きく異なっていた。太刀は剣道のようなイメージで馴染みのある使い方であったと思う。杖は使い方が新鮮で、様々な形があった。私が印象にあったのは、両手を上にあげて守備をし、そこから相手を突きにいく形である。突いた後は鳩尾、首、顔を突いており、相手を完全に圧倒しているような形に見えた。他にも杖を回転させることで、守備と攻撃のスイッチをスムーズにしていた。このように杖の形は新鮮でとても面白い。守備、攻撃どちらにも長けていて、太刀よりも使える武器に感じた。

私自身古武道に対して、正直意欲を感じるような人間ではないが、古武道を行う人に対しては尊敬がある。日本の伝統的なものを引き継ぐだけでなく、精神を極めているように感じる。今回の杖道を見ても、もちろん形を追い求めることの素晴らしさも感じたが、杖道に対しての思い入れ、礼儀などが雰囲気を通して伝わってきた。中々若者が入れるような雰囲気ではなく、良い意味で独特の雰囲気であった。これから大人になるに連れて、杖道を含めた古武道の魅力を真に感じられるようになるために、今回は良い経験となった。

またこのような課外授業があれば嬉しいと感じる。

